

W-1-2

クプサビニ語とシダーマ語における通言語的傾向と類型タイプの現れ 河内 一博

防衛大学校 先端学術推進機構 グローバル・セキュリティ・センター／総合教育学群 外国語教育室
kawachi@nda.ac.jp, kazuhirokawachi@gmail.com

発表要旨：経路と様態を含む移動事象を表すのに使う表現において、クプサビニ語（南ナイル；ウガンダ東部）は多くの場合付随要素枠付（satellite-framed）言語の特徴を、シダーマ語（東クシ；エチオピア南部）はたいてい動詞枠付（verb-framed）言語の特徴を示す。付随要素枠付言語は移動様態動詞を、動詞枠付言語は移動経路動詞を多く持ち、それぞれの頻度が高いという仮説がある（Slobin 2004）が、これら二つの言語の移動経路動詞の数に大きな違いはない。ビデオ実験での両言語の主体移動の経路の表現を比較すると、通言語的に動詞で表され易いとされる UP/DOWN や ACROSS と、動詞で表されにくいとされる TO や TOWARD には、一般的傾向が反映され、両言語はあまり大きくは違わない。一方、動詞で表され易くも表されにくくもない経路（INTO/OUT, AROUND）には、移動表現の類型タイプや個別言語の特異性が言語使用にある程度反映され、両言語で違いが見られることがある。なぜこのような経路の種類による違いが現れるかを、動詞と他の形態素との相違、語彙化の傾向、構文の特徴等といった点から考察する。

1. はじめに ウガンダ東部で話されているクプサビニ語（Kupsapiny）（ナイル・サハラ大語族、ナイル語族、南ナイル、カレンジン；ISO: kup）とエチオピア中南部で話されているシダーマ語（Sidaama）（アフロ・アジア大語族、クシ語族、東クシ、ハイランド・イースト・クシ；ISO: sid）の文法的特徴の概略は表1の通りである。どちらの言語にも複数の動詞を使う構文が二種類あり、そのどちらもすべての動詞に主語の人称標示がある。ここでは動詞が主語を共有するもののみを扱う。クプサビニ語の複数の動詞を使う構文はどちらも、V1 のみにテンスの標示が、シダーマ語の複数の動詞を使う構文はどちらも、最後の動詞のみにアスペクトの標示がある。両言語の複数の動詞を使う構文で他の動詞はテンス・アスペクトの標示がなく（主語の人称標示があるものの）定形とは呼べない形式になっている。

表1：クプサビニ語とシダーマ語の文法的特徴の概略

	クプサビニ語	シダーマ語
語順	VSO（比較的定まっている）	SOV
形態的タイプ	膠着（いくらかの融合）	膠着
接辞	接頭辞、接尾辞	接尾辞、超分節辞（ピッチ・アクセント）
形態的格標示	有標主格型（トーンのパターン）	主格対格型（接尾辞、超分節辞）
複数の動詞を使う構文 I: 事象（要素）の時間的順序	TNS-V1 PTCP-V2 (PTCP-V3, etc.)	V1-CNN ... Vn-ASP
複数の動詞を使う構文 II: 事象（要素）の時間的部分一致	TNS-V1 PTCP-V2-IPFV	V1-INF-AILM V2-ASP

2. 先行研究 移動経路の種類によって構文パターンが違ってくるということは特に動詞枠付言語に関して言われてきている。例えば、Aske (1989) はスペイン語でアスペクトが非完結的 (atelic) である場合に動詞枠付言語の特徴に反して、様態動詞が主動詞として用いられ経路が動詞は使わずに前置詞のみで表されることがあることを指摘している。一方 Talmy (cited as a p.c. in Slobin & Hoiting 1994: 498), Slobin (1997, 2004) は、動詞枠付言語はいわゆる “boundary crossing constraint” により移動物が境界を越える場合には移動様態動詞は参照物・参照地と経路を表す句（ロマンスでの前置詞句）を取ることができないが、越えない場合はそのような句を取ることができるという（しかし Kawachi Under review a で指摘しているように、境界を越えない up や down の経路には、動詞枠付言語は通常その特徴的な構文を使う）。また、バントウの言語でも移動経路の種類によって使われる構文パターンが違ってくるのが報告されている（Abe 2016, Hieda 2016, Yoneda 2016）。ただ、これらの移動経路の種類による構文パターンの違いがどの程度他の言語にも当てはまるのか、実際の言語使用においてどのように現れるかは良くわかっていない。異なる種類の移動経路が通言語的にどのような形態素で表されやすいかに関して違いが見られるかは、Talmy (1985, 1991, 2000b) の類型論をさらに厳密なものに発展させ移動表現の類型論をより深く理解するために調べてみる価値がある。

3. クプサビニ語とシダーマ語の移動表現 3.1 で両言語の経路を表す形態素（実験で使われた形態素のみ）を、3.2 で移動表現に使われる構文を記述する。（クプサビニ語の移動表現については Kawachi 2014, 2016b を、シダーマ語の移動表現については Kawachi 2012, 河内 2017 を参照。）

3.1 クプサビニ語とシダーマ語の経路表現の形態素 表2は両言語の移動経路を表す文法的形態素（実験で使われたもののみ）の一覧である。両言語とも位置名詞を副詞的に使って経路を表すことがあるが、大きな違いは、クプサビニ語では動詞接尾辞と前置詞を、シダーマ語では格の接辞（接尾辞または超分節辞）および格変化する場所を表す名詞句形成クリティックを使うということである。表3は両言語の移動経路を表す動詞（実験で使われたもののみ）の一覧である。付随要素枠付言語は移動様態動詞を、動詞枠付言語は移動経路動詞を多く持ち、それぞれの頻度が高いという仮説がある（Slobin 2004）が、これら二つの言語の移動経路動詞の数に大きな違いはないようである。表3でシダーマ語の%を付けた形式は多義的であり、こ

の表の 2 箇所に現れている。クブサビニ語の *past* と *via* の区別は難しく、*past* にも分類できる動詞は意味が広いので、どれも *via* に分類している。シダーマ語の *via* (と *toward*) に分類した *hig-* ‘move toward, move via’ も適用範囲が広く、*along*, *cross*, *over*, *past*, *through* に使われる。両言語で、移動経路だけでなく移動の様態も表している動詞がある (KUP: *laap* ‘climb up’, *sùrurtè* ‘descend fast’, SID: *gidd-* ‘climb up’, *luut-* ‘slide through’, *hulluuk-* ‘slide through’)。

表 2: クブサビニ語とシダーマ語の移動経路を表す文法的形態素 (実験で使われたもののみ)

クブサビニ語	シダーマ語
動詞接尾辞: -e ‘(APPL) from, via (through, across, past を含む)’ (also, ‘at’), -ci/-tyi ‘(APPL) to’ (限られた動詞のみ), -key ‘away (< REFL)’ 前置詞: <i>pakà</i> ‘up to’, <i>akáy/akóy</i> ‘up to’, <i>àm/òm</i> ‘from’ (also, ‘at’), <i>kùcake</i> ‘(staring) from’ 位置名詞 (副詞的用法): <i>nyip</i> ‘downward (< bottom)’, <i>taay</i> ‘forward (< front)’, <i>sáj</i> ‘to the outside (< outside)’, <i>tárat</i> ‘upward (< top)’	格接尾辞: 奪格・具格・場所接尾辞 - <i>nni</i> ‘from, with, via’ (位置名詞につく場合のみ ‘via’; ‘via’ は位置名詞の最後の母音を長くすることでも表される) 向格接尾辞 - <i>ra</i> ‘to’ (属格の名詞句に付く) 向格超分節辞: 名詞の最後の母音の高ピッチ ‘to, via’ 名詞句形成クリティック: = <i>wa</i> ‘to a place’ (場所ではなく物体を表す属格の名詞句または関係節に付く), (also, ‘at a place’) 位置名詞 (副詞的用法): <i>ále</i> ‘upward (< upperness, aboveness)’, <i>wóro</i> ‘downward (< lowerness, belowness, underneath)’

表 3: クブサビニ語とシダーマ語の移動経路動詞 (実験で使われたもののみ)

経路	クブサビニ語	シダーマ語
along	<i>nààm</i> ‘follow’, <i>mùr</i> ‘move along (the edge of)’	<i>amad-</i> ‘move along (lit. catch, hold)’
around	<i>mùutu</i> ‘move around’, <i>raawùùn</i> ‘move around (< English ‘round)’	<i>do-</i> ‘move around’, <i>qaangaab-</i> ‘move around’
cross boundary	<i>mùnte</i> ‘cross the boundary (enter or exit)’	—
cross	<i>yay</i> ‘cross’, <i>kùròòsinken</i> ‘cross (English)’	<i>tais-</i> ‘cross’, <i>mur-</i> ‘cross (lit. cut)’
down	<i>rèkte</i> ‘descend’, <i>sùrurtè</i> ‘descend fast’, <i>sùttye</i> ‘fall from somewhere’, <i>pur</i> ‘fall down’	<i>dirr-</i> ‘descend’, <i>ub-</i> ‘fall down’
from	<i>neet</i> ‘(get up and) leave’, <i>noomèn</i> ‘start to move’, <i>pùkaktè</i> ‘leave (a place/an object)’	<i>ka</i> ‘start to move from, leave’
over	<i>siir</i> ‘move over’	—
through	—	<i>luut-</i> ‘slide through’, <i>hulluuk-</i> ‘slide through’
to	<i>pùnte</i> ‘arrive’, <i>kèèci</i> ‘arrive’	<i>sa</i> ‘move past, pass to the other side, arrive’%
to.in	<i>wùt</i> ‘enter’	<i>e</i> ‘enter’
to.out	—	<i>ful</i> ‘exit, ascend’%
toward	<i>lèèkité</i> ‘approach, get closer’, <i>nokkyi</i> ‘approach, get closer’, <i>tàkkyi</i> (西部方言) / <i>tòkkyi</i> (東部・中央方言) / <i>tèkkyi</i> (西部方言) ‘approach, get closer’	<i>šik</i> ‘approach’, <i>hig-</i> ‘move toward, move via’%
up	<i>laap</i> ‘climb up’	<i>ful</i> ‘exit, ascend’%, <i>gooddiid-</i> ‘ascend’, <i>gidd-</i> ‘climb up’
via	<i>punté</i> ‘pass to the other side’, <i>kèttye</i> ‘pass to the other side (though the figure entity should not have moved there/against/contrary to a rule/someone’s expectation/contrary to a plan)’, <i>tìl</i> ‘cross, pass by, move through (an opening or three-dimensional space, without causing any friction)’, <i>muut</i> ‘make a short cut, move straight to the goal (lit. cut)’	<i>hig-</i> ‘move toward, move via’% <i>sa</i> ‘move past, pass to the other side, arrive’%

また、空間ダイクシスを表す形態素として、両言語に主体移動動詞 (クブサビニ語: *čò* ‘come’, *wò* ‘go’, シダーマ語: *da-* ‘come’, *had-* ‘(leave and) go’, *mar-* ‘go (and arrive)’) があり、クブサビニ語には空間ダイクシス接尾辞 (継続的な移動を表す -*aa/-oo* をその直前に伴わない場合、-*u* ‘hither’, -*e/-t* ‘thither’, -*ø* ‘(deictically neutral)’) (ただし、すべての動詞にこれら 3 つの形式があるわけではない) ; 継続的な移動を表す -*aa/-oo* をその直前に伴う場合、-*u* ‘hither’, -*e* ‘thither’) がある (Kawachi Under review b)。(また両言語には他に、客体移動動詞や指示詞などの空間ダイクシスを表す形態素がある。)

3.2 移動表現に使われるクブサビニ語とシダーマ語の構文 どちらの言語でも動詞として経路動詞またはダイクシス動詞のどちらかのみが起こることがある。クブサビニ語では、起点は動詞のアプリカティブの接尾辞 -*e* ‘from, via, at’ の目的語または前置詞 *àm/òm* ‘from’ か *kùcake* ‘(staring) from’ の目的語として表され、着点は目的語に使われる格 (有標主格型格標示体系での absolute case) の形式または前置詞 *pakà* ‘up to’ か *akáy/akóy* ‘up to’ の目的語 (あるいは限られた動詞に付くアプリカティブの接尾辞 -*ci/-tyi* ‘to’ の目的語) として表され、通過点は動詞のアプリカティブの接尾辞 -*e* ‘from, via, at’ の目的語として表される。シダーマ語においては、起点は奪格・具格・場所接尾辞 -*nni* ‘from, with, via’ を伴った名詞句によって、着点は場所を表す名詞に付く向格接尾辞 -*ra* または向格超分節辞を伴った名詞句、あるいは物体を表す名詞に付く名詞句

形成クリティック =wa 'to a place' を伴った名詞句によって、通過点は位置名詞に奪格・具格・場所接尾辞 -nni 'from, with, via' を伴った名詞句または向格超分節辞を伴った名詞句によって表される。

より複雑な移動事象を表すのにどちらの言語でも表 1 の 2 種類の複数の動詞を使う構文 (の動詞の結合が強いサブタイプ) が使われる。経路・ダイクシスと様態を含む移動事象を表す場合、(他の場合には事象 (要素) の時間的順序を表す) 複数の動詞を使う構文 I において、クプサビニ語 (TNS-V1 PTCP-V2 (PTCP-V3, etc.)) でもシダーマ語 (V1-CNN ... Vn-ASP) でも V1 に様態動詞、V2 以降に経路動詞・ダイクシス動詞が起こる。(他の場合には事象 (要素) の時間的部分一致を表す) 複数の動詞を使う構文 II において、クプサビニ語 (TNS-V1 PTCP-V2-IPFV) では V1 に様態動詞、V2 に経路動詞かダイクシス動詞 (または TNS-V1 PTCP-V2 PTCP-V3-IPFV で、V2 に経路動詞、V3 にダイクシス動詞)、あるいはその反対の順番で V1 に経路動詞かダイクシス動詞、V2 に様態動詞が起こるが、シダーマ語 (V1-INF-AILM V2-ASP) では V1 に様態動詞、V2 に経路動詞かダイクシス動詞 (または V2-CNN V3-ASP で、V2 に経路動詞、V3 にダイクシス動詞) が使われる。様態に言及せずに経路とダイクシスを含む移動事象を表す場合、クプサビニ語でもシダーマ語でも複数の動詞を使う構文 I が使われ、V1 に経路動詞、V2 にダイクシス動詞が起こる。

4. クプサビニ語とシダーマ語のビデオ実験のデータ

4.1 実験手順 クプサビニ語の実験は 2015 年 12 月に Sebei Sub-region の Kapchorwa で、シダーマ語の実験は 2016 年 2 月に Sidaama Zone の Hawassa で行なった。NINJAL(-Kobe) 移動表現プロジェクトの C 実験の合計 44 のビデオ・クリップ (主体移動のみ) を 2 種類の順番の一つを使って実験参加者に提示し、クリップで何が起こったかを自分の母語で言い表してもらった。クプサビニ語の実験参加者はこの言語の母語話者 17 名 (女性 7 名、男性 10 名、18~55 歳、平均 35.3 歳) で、全員がウガンダの公用語の一つの英語を第二言語として話す。シダーマ語の実験参加者はこの言語の母語話者 20 名 (女性 7 名、男性 13 名、18~30 歳、平均 21.6 歳) だが、コーディングが終了したのはそのうちの 12 名分 (女性 5 名、男性 7 名、18~28 歳、平均 21.2 歳) で、これらのデータのみを本研究では使う。彼らは全員エチオピアの公用語であるアムハラ語を第二言語として話す。

データについては、各々のビデオのシーンで起こった事象を実験参加者が述べたものを録音し、メインのコンサルタントと共に IPA を使って入力したあと、一つ一つの録音データと照らし合わせながら、メインのコンサルタントとさらに確認、修正した。その後、メインのコンサルタントに協力してもらいながら、NINJAL(-Kobe) 研究グループの共通のエクセルのファイルを使ってデータのコーディングを行なった。

4.2 実験結果 図 1 と図 2 はそれぞれ、各々の種類の経路を含むビデオ・クリップの事象を言い表すのに、経路動詞 (語根) が平均いくつ使われたか、経路動詞が主動詞として平均いくつ使われたかを示す。これらの図で / / を使って表しているのは、ビデオのシーンにおける経路の種類である (例えば、/TO/ は /TO/ が起こるシーン)。使われた言語形式が表す経路の種類という意味ではない。経路動詞が使われたという場合、表 3 にある対応する動詞がそれぞれ使われたとは限らないし、個々の経路を含んでいるビデオ・クリップに対して実験参加者がそれぞれの経路を表現したとは限らない。図 1 で数値が 1 よりも多くなっている経路の種類があるのは、経路動詞が 2 回以上使われたことがあるためである。

図 3 と図 4 はそれぞれの経路が何らかの方法で表された場合 (例えば、/TO/ は to を表す形態素が使われた場合) のみを考慮に入れ、そのうち、動詞 (語根) で表された割合および動詞 (語根) のみで表された割合 (クプサビニ語で動詞接尾辞により経路が表されている場合は除く) を示している。すなわち、図 3 は、それぞれの種類の経路を含むビデオ・クリップで起こった事象を述べるのに実際にその経路を表す形態素が起

図 1: 各々の種類の経路を含むクリップの事象を言い表すのに使われた経路動詞の平均の数

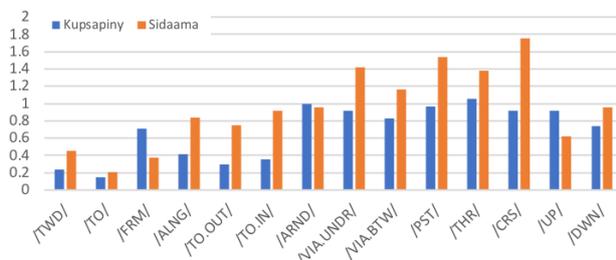


図 2: 各々の種類の経路を含むクリップの事象を言い表すのに経路動詞が主動詞として使われた平均の回数

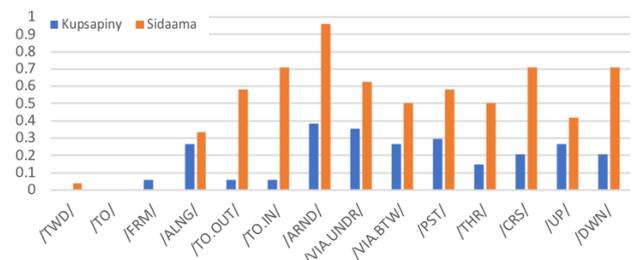


図 3: 各々の種類の経路を含むクリップの事象を言い表すのにその経路を表す形態素が起った場合のうち、動詞が使われた割合

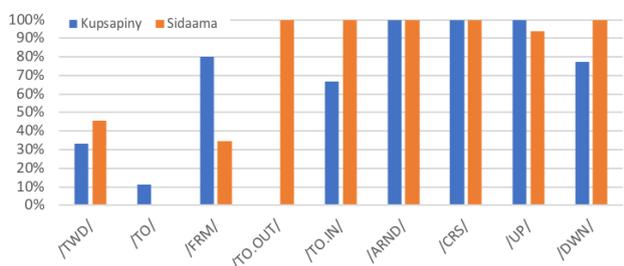
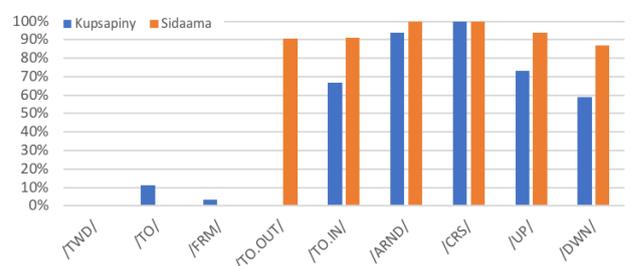


図 4: 各々の種類の経路を含むクリップの事象を言い表すのにその経路を表す形態素が起った場合のうち、動詞のみが使われた割合



5.2 類型タイプの現れ

・経路の種類にかかわらず一般に、シダーマ語ではクプサビニ語よりも経路が主動詞に現れることが多い(図2)。これには、シダーマ語が動詞枠付言語であり、特にアフリカの複数の動詞を使う構文において、移動様態動詞、そして移動経路動詞(さらにその後にダイクシスの動詞)という順番で起る傾向があり(Kawachi 2016a)、このような構文で主動詞が最初に来るクプサビニ語と違って、シダーマ語では主動詞が最後に来るといった構造的な原因がある。

・/UP/ と /DWN/ のシーンに、シダーマ語はクプサビニ語よりも主動詞で経路を表すことが多い(図2)。両言語とも‘ascend’の動詞と‘descend’の動詞を頻繁に使うが、シダーマ語はこれらの動詞を主動詞として使うのに対し、クプサビニ語は‘ascend’や‘descend’の動詞の前に移動様態動詞を主動詞として使うことが多くあるためであると考えられる。

・どちらの言語でも、あまり動詞は使われないと言われる /FRM/ のシーン(クリップ数:2)に、動詞が頻繁に使われている(図1)。経路 from を表す動詞の使用回数は、クプサビニ語では *jeet* ‘(get up and) leave’ が合計 22 回(主動詞で 21 回)、*noomèn* ‘start to move’ が 1 回(主動詞で 1 回)、*pikaktè* ‘leave (a place/an object)’ が 1 回(主動詞で 1 回)、シダーマ語では *ka* ‘start to move from, leave’ が全体で 8 回(主動詞では 0 回)だった。経路 from を表す動詞は、クプサビニ語では複数の動詞を使う構文の主動詞に多く起こっているのに対し、シダーマ語では複数の動詞を使う構文の連結接尾辞を伴った形式としてのみ使われ、主動詞としては使われていない(図2)。From の経路は /FRM/ のビデオのクリップで初めの方に現れているので、これは事象を起こった順番に並べる動詞構文の構造の現れ(Kawachi 2016a)である。

・/ARND/ のシーン(‘walk/run around the tree’)にどちらの言語も動詞を使うことが多いが、これは他の言語と違う点のようである(図1、図3)。さらにはクプサビニ語ではほとんどの場合、シダーマ語ではすべての場合に around を動詞のみで表している(図4)。/ARND/ のシーンにはダイクシスを表さないため、複数の動詞を使う構文で主動詞が最後に来るシダーマ語は主動詞として *do* ‘move around’ または *gaangaab* ‘move around’ を使っている(図2)。それに対し、クプサビニ語は複数の動詞を使う構文の最初に移動様態動詞が来ることが良くあるので、経路動詞 *mùùtu* ‘move around’, *raawùùn* ‘move around (< English ‘round’)' が主動詞として使われる回数が減っている。

5.3 個別言語の特異性

・どちらの言語でも /ALNG/, /PST/, /THR/, /VIA.UNDR/, /VIA.BTW/ のシーンで個々の経路を特定して表す動詞は少なく、あっても頻度は低い(4.2 節)。クプサビニ語ではこれらの経路に抽象的な *via* を表す接尾辞 *-e* (APPL) from, via at を様々な動詞に使うので、これらのシーンに使う経路動詞の数は多くはない。一方、シダーマ語には抽象的な *via* を表す動詞 *hig* ‘move toward, move via’ があり、この動詞を(特に複数の動詞を使う構文 I の連結接尾辞の付いた形式で)使用することで、(/TWD/ だけでなく) /ALNG/, /PST/, /THR/, /VIA.UNDR/, /VIA.BTW/ のシーンに動詞が使われる率を上げている(図1)。

・シダーマ語には‘enter’を表す動詞と‘exit’を表す動詞があり、ともに頻繁に使われるが、クプサビニ語には‘enter’はあっても‘exit’はなく、‘cross the boundary’を表す動詞と‘inside’か‘outside’を表す位置名詞を使って(あるいはさらには動詞接尾辞 *-e* (APPL) from, via, at または前置詞 *àm/òm* ‘from’ を使い)‘enter’と‘exit’を表すことが多い。(/TO.IN/ のビデオのシーン ‘walk/run into the building’ を表すのには *wò ko* (go house) (*ko* は ‘the inside of the house’ を意味する) という表現を使うことも多い。) さらにクプサビニ語では‘enter’を表す動詞や‘cross the boundary’を表す動詞の前に移動様態動詞を主動詞として使うことが多くあるので、これらの動詞が主動詞として使われることは少ない(図2)。

6. 通言語的傾向と類型タイプ: クプサビニ語とシダーマ語のデータからの考察

・語彙的形態素としての動詞 Talmy (1977, 2000a: Chapter 1) の Closed-class Semantics によると、閉じた類の形式 (closed-class forms: CCs) は開いた類の形式 (open-class forms: OCs) とは違い、より schematic な概念(ユークリッド的ではない、よりトポロジカルな概念)を表し、表すことができる概念(概念範疇および概念範疇の成員)において制限があり、様々な中立性を示す。例えば、経路の具体的な形状に関して中立なので、*I circled/zigzagged through the woods.* という文において、CC である前置詞 *through* がより schematic な経路を、OC である動詞 *circle/zigzag* がより具体的な形状の経路を表している (Talmy 2000a: 164)。移動事象の要素の中で経路は最も schematic であるが、個々の経路は CCs による表され易さの違いがあるのかもしれない。経路の *from* や *to* は点と線というトポロジカルな概念要素が関わり、動詞なしで表されることが多い。それに対し、*up* や *down* は地球をもとにした縦軸という暗に示された第二参照物 (secondary reference object) を要し、より具体的な概念要素として、第二参照物に対しての移動物の移動の角度が使用の基準になる。さらには *force dynamics* が関わるので、移動において困難・容易さという概念要素が伴い易く、しばしばその概念も融合して語彙化された動詞だけで表されることが多い。例えば、クプサビニ語の *laap* ‘climb up’ とシダーマ語の *gidd* ‘climb up’ の意味には移動の困難さという概念要素が含まれている。これは *across* にも当てはまるかもしれない。他の *force dynamics* の概念である摩擦を含む動詞としてシダーマ語の *luut* ‘slide through’, *hulluuk* ‘slide through’がある。(韓国語の配置動詞の例として Kawachi (2007) を参照。ただ、

Talmy (2000a: 36, 194) が指摘しているように CC で force dynamics の概念要素が表されることもある。例：英語の前置詞 *upon* で表される攻撃 (attack)、*into* で表される衝突 (collision)。(これら両極の中間に *to.in*, *to.out*, *around* といった動詞だけで表され易くも表されにくくもなく、言語の類型タイプや特定言語の特異性による経路があるように思われる。また、移動物が関わるのは、経路の *from* や *to* では点からの・点への移動であるが、移動の中間の段階では線、平面、立体を通る移動であることが多く、ほとんどの場合時間の幅があるため影響を被る物体とも解釈可能であり、このことが移動の中間の段階の経路への他動詞の使用の動機になっているかもしれない。(一方で、*up/down* の場合は、参照物・地を述べなくて良いということが(目的語を取る前後置詞や applicative の接辞ではなく)自動詞の使用を可能にしているようである。)

・動詞のみ、あるいは文法的形態素のみでの経路の特定可能性 経路は動詞のみで特定できるかどうか、文法的形態素のみで特定できるかどうかにおいて傾向があるようである。クプサビニ語とシダーマ語の両言語で *down*, *up*, *across*, *around*, *along*、シダーマ語で *past* と *through* は動詞だけで特定し、動詞だけ使って表すことができる。(クプサビニ語の *via* 動詞は基準物のタイプとの関係により類推できる。)一方、*to* や *from* は(動詞を始めとする語彙的形態素を使わなくても)文法的形態素だけで表せるし、*to.out* や *to.in* は位置名詞(と文法的形態素の組み合わせ)で表せる。(ただこれらの経路に動詞も使うかどうかは構文の類型タイプによると考えられる。付随要素付言語では経路動詞は通常使わない。)他の経路の多くは、抽象的な経路を表す動詞と(位置名詞や)文法的形態素の組み合わせ等を使わないと特定の表すことができない。このような経路(例えば、*via.under* や *via.between*)はより複雑あるいは特殊であるのかもしれない。

・有標性 言語によりある種の経路を動詞で特定化するのは有標(あるいは、大げさ)であるということがある(これは特定の動詞の頻度の低さとも関係があるようである)。クプサビニ語とシダーマ語で *to* を表す動詞(‘*arrive*, *reach*’)を使うよりも、この経路を表す文法的形態素を(クプサビニ語では動詞接尾辞・前置詞、シダーマ語では向格接尾辞・向格超分節辞)(特にダイクシスの動詞とともに)使う方が普通である。また、両言語で *along* を表す動詞を使うよりも、クプサビニ語では動詞接尾辞 *-e* (‘*APPL*’) *from*, *via*, *at*’を使用する方が、シダーマ語ではより抽象的な経路 *via* を表す動詞 *hig-* ‘*move toward*, *move via*’を複数の動詞を使う構文 I の連結接尾辞の付いた形式で位置名詞とともに使用(5.3節)する方が普通である。

7. 結論 以上のように、クプサビニ語とシダーマ語のビデオ実験で、通言語的傾向、類型タイプ、個別言語の特異性を反映していることを示唆していると考えられる結果が得られた。今回見ることができなかった課題として、個々のデータで動詞が一つだけ使われているか、二つ以上使われているかにより、類型タイプの現れとして経路を表す形態素がどのように違ってくるか等がある。

略号 ACCOBL: accusative-oblique, AILM: ablative-instrumental-locative-manner, APPL: applicative, ASP: aspect, CNN: connective (converb), EP: epenthetic vowel, INF: infinitive, IPFV: imperfective, KUP: Kupsapiny, NOM: nominative, POSS: possessive, PTCP: participle, R.PRF: recent perfect, REFL: reflexive, SID: Sidaama, T.PST: today past, TNS: tense

謝辞 クプサビニ語のメインのコンサルタント Chebet Francis 氏、シダーマ語のメインのコンサルタント Iyasu Gudura 氏と Genene Gudura 氏、両言語の実験協力者の方々に感謝を申し上げます。本研究は科学研究費補助金(基盤研究(B) 15H03206、基盤研究(B) 15H05157)、国立国語研究所プロジェクト支援により行うことができました。

参考文献

- Abe, Yuko. 2016. Event integration patterns in Bende (Bantu, F12). *Asian and African Languages and Linguistics*, 10, 157–178. <http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/85068>
- Aske, Jon. 1989. Path predicates in English and Spanish: A closer look. *Proceedings of the 34th Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 15, 1–14.
- Hieda, Osamu. 2016. Complex motion events and clause combining in Saamia. *Asian and African Languages and Linguistics*, 10, 93–111. <http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/85064>
- Kawachi, Kazuhiro. 2007. Korean putting verbs do not categorize space contrastively in terms of “tightness of fit”. *Lingua*, 117.10, 1801–1820.
- Kawachi, Kazuhiro. 2012. Event integration patterns in Sidaama (Sidamo). *Proceedings of the 34th Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society, General Session*, 175–186.
- Kawachi, Kazuhiro. 2014. Patterns of expressing motion events in Kupsapiny. In Hieda, Osamu (ed.) *Recent Advances in Nilotic Linguistics (Studies in Nilotic Linguistics Vol. 8)*, 103–136.
- Kawachi, Kazuhiro (with the help of data provided by Yuko Abe, Osamu Hieda, Kyoko Koga, Junko Komori, Motomichi Wakasa, Nobuko Yoneda, and Hiroshi Yoshino). 2016a. Introduction: An overview of event integration patterns in African languages. *Asian and African Languages and Linguistics*, 10, 1–36. <http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/85062>
- Kawachi, Kazuhiro. 2016b. Event integration patterns in Kupsapiny. *Asian and African Languages and Linguistics*, 10, 37–91. <http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/85063>
- 河内一博. 2017. 第9章: シダーマ語の空間移動の経路の表現方法. 松本曜(編)『シリーズ言語対照(外から見る日本語)第7巻: 移動表現の類型論』pp.213–246. くろしお出版
- Kawachi, Kazuhiro. Under review a. Should Talmy’s motion typology be expanded to visual motion? Investigation into expressions of motion, agentive motion, and visual motion in Sidaama (Sidamo).
- Kawachi, Kazuhiro. Under review b. Deictic directional verb suffix complex used for different types of motion including associated motion and for aspect in Kupsapiny.
- Slobin, Dan I. 1997. Mind, code, and text. In Bybee Joan and John Haiman (eds.) *Essays on language function and language type*, 437–467. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Slobin, Dan I. 2004. The many ways to search for a frog: Linguistic typology and the expression of motion events. In Sven Strömquist and Ludo Verhoeven. (eds.) *Relating events in narrative: Typological and contextual perspectives*, 219–257. Mahwah: Lawrence Erlbaum Associates.
- Slobin, Dan I., and Nini Hoiting. 1994. Reference to movement in spoken and signed languages: typological considerations. *Proceedings of the Twentieth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 487–505.
- Talmy, Leonard. 1977. Rubber sheet cognition in language. *Papers from the Thirteenth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, 612–28.
- Talmy, Leonard. 1985. Lexicalization patterns: Semantic structure in lexical forms. In Timothy Shopen. (ed.) *Language typology and lexical descriptions: Vol. 3. Grammatical categories and the lexicon*, 36–149. Cambridge: Cambridge University Press.
- Talmy, Leonard. 1991. Path to realization: A typology of event conflation. *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of Berkeley Linguistics Society*, 480–519.
- Talmy, Leonard. 2000a. *Toward a cognitive semantics, Vol. I: Concept structuring systems*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Talmy, Leonard. 2000b. *Toward a cognitive semantics, Vol. II: Typology and process in concept structuring*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Yoneda, Nobuko. 2016. Event integration patterns in Herero: The case of motion event components. *Asian and African Languages and Linguistics*, 10, 219–244. <http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/85071>